

今から24年前、私は教員でありながらイギリスに留学する機会に恵まれました。英語の教育法について半年間学ぶことができたのは本当に幸運だったと思います。そこで身につけたものは、その後の私の教員人生のバックボーン（考え方の拠り所）になっていることは間違いありません。そこで今日は、その留学期間に私が体験した、英語教育法以外で感銘を受けたたくさんの出来事の一つを紹介したいと思います。それは異文化体験です。

留学先の大学からは、留学前に、「期間中、小学校を訪問することが数回あるので、小学生とともに活動できる、何かご自身にできる得意なことを準備しておいてください」と言われていたのです。私は学生時代、一応サッカー部に所属し人並みよりはサッカーはできると思っていたので、子どもたちと一緒にボールを追いかければ、良い国際交流ができるだろうと安易に考えていました。です。で、小学校訪問直前、現地の大学の先生から「大倉さんは何をする予定ですか？」と聞かれたときも、予定通り「子どもたちと一緒にサッカーをしようと思います」と答えたのです。それを聞いた先生はしばし無言になり、ぼつりと一言、申し訳なきように「サッカーですか・・・。何か他にできることはありませんか？」とおっしゃったのです。その瞬間私は顔から火が出るほど恥ずかしいことに気付いたのです。「そうか。プレミアリーグが存在するサッカー発祥の国の子どもたちが、まだプロ化間もない国の一学校教師とサッカーをしても何も面白くないはずだよな」と悟ったわけです。

この状況を救ってくれたのが何だと思えますか。Calligraphyです。そうです。書道です。何かあったときのためにと、渡航前、書道の先生がくださった書道道具一式を持ってきていたのです。荷物が増えるのを我慢して持つてきておいて良かったと心から思いました。「Calligraphyならできますよ。」と大学の先生に伝えると、先生は満面の笑みを浮かべて、「Calligraphy!それは有り難い。是非それでいきましょう」と話はすんなりと決まったのです。

学生の頃、書道部に所属したり、芸術の授業で選択した経験など全くなかった私ですが、ここは腹を括って堂々と書道を披露しました。姿勢と呼吸を整えて、「This is love」とか、「This is cherry blossoms」とか言いながら、「愛」とか「桜」などの漢字を次々と筆で書いていくのです。自分では相変わらず下手くそな字だな、などと感じながら一枚一枚半紙に筆を落とします。すると、しーんとして私を見ていた子どもたちの雰囲気次第に変化し始めたのです。「オー、クール!」などという言葉が漏れ聞こえてきます。子どもたちの眼差しには私に対する畏敬・尊敬の念まで浮かんでいるのです。私はその後、子どもたちそれぞれに名前を聞き、それをカタカナ表記にして教え、それを筆で自ら書かせました。自分で書いた文字を見て、子どもたちは大盛り上がりで大満足です。この授業後、私が歩くところには子どもたちの行列ができ、なんとサインをねだられるということまで生じたのです。子どもたちのノートやカバン、腕などにまでサインペンで自分の名前をそれっぽく書きながら、それほどのものでもない私の書道も、異文化の壁を越えると、人を感動させることができるのだと心の底から感じました。日本人として、日本を代表するような文化・芸術・芸能ができることがいかに大切かをこの時痛感したのです。同時に、もっと真剣に自国の芸術文化といえるものを若い頃から学んでおけばよかったと後悔もしたわけです。

もう一つ異文化体験を紹介します。今度は国と国との間の異文化ではなく、日本国内の地域間の異文化体験で自分が感動させられた体験です。

まだ私が20代だった頃、仲の良い同年代の男性教師が同僚にいて、彼が結婚するときのことです。彼の出身は鹿児島市内ですが大学は琉球大学を卒業していて、お相手は大学時代に知り合った沖繩の方です。同僚として私もその披露宴に参加させてもらいました。その披露宴の中で余興の時間があつたのですが、そこで私の目を釘付けにしたのが、沖繩の方々のエイサーだったのです。迫力のある太鼓の音と躍動感のある踊り。今でも鮮明に思い出します。鹿児島出身である彼の結婚式に色を添えようと、真剣勝負で自分たち沖繩の文化芸能を披露している。その姿に私は感動を覚えました。さらに、その演舞の後半部分からは、新郎自身もタキシード姿のまま舞台上に上がってエイサーに加わり、仲間とともに演じます。あらかじめ打ち合わせていたとは思いますが、このときには私は感動を通り越して、羨望の念と言いますか、この同僚の先生に対してかっこよさとか羨ましさをも覚えたのです。学生時代に自分が所属することになった地域の文化をリスペクトし、自分をその土地に順応させ、自信と誇りを持って堂々とその土地の文化芸能を演じている。日本という小さな国の中にも様々な特徴を持った文化が存在していて、国内でも異文化体験はできるんだと感じることのできる出来事でした。

でも、改めて、なぜこれほどまでに私があつた同僚の結婚式のエイサーに心を動かされたのかを、私なりの探究心に駆り立てられていろいろ調べてみたのです。ネットの記事の中に納得できるものがあったので紹介します。

「だれでも初めてエイサーを見たとき、無条件に心を打たれてしまう。この高揚感を伴う感激を沖繩の言葉では「チムドンドン」と表現する。なぜ、見る者の魂をこんなにも震わせるのか。それは太鼓の音や踊りの勇壮さであるかもしれない。

しかし心を打つ本当の理由は、各青年会が自分のシマ(字)のエイサーを、誇りを持って魂を込めて踊るところにある。各青年会の地域的自主性が色濃く映し出されている。

地方(じかた)の唄・三線、大太鼓、締太鼓、手踊り、それぞれが踊りでありながらも一糸乱れぬその動きは圧巻だ。統制のとれた隊列の動きも視線を変えて眺めてみてほしい。バチさばき、足の上げ具合、自分なりの好みを見つけるのもまた楽しみの一つになるだろう。」

とありました。これは見る側目線の説明ですが、この説明の中の「魂」と言う言葉がキーワードだと私は思うのです。人の心を表す英単語には、喜怒哀楽等を表す感情の変化に深く関係する Heart、思考・判断・知性など論理的な脳の働きに関係する mind、そして精神的な心の拠り所、精神的支柱を表す spirit があります。spirit これが「魂」ですね。「魂」はその日の気分や感情、こまごまとした理屈に動かされることのない、決してブレることのない心の中の太い柱です。「俺はこの土地に生まれ育てられてきた。だからこの土地に受け継がれてきた文化に敬意を払い、自信と誇りを持ってこの土地のエイサーを演じる。以上、終わり。」これでいいのです。というより、このシンブルな姿勢が何より格好いいのです。結婚式の余興のエイサーを演じる人たちの中に、私は恐らくこのような「魂」の放出を感じ取り、自分の魂が大きく反響していたのだと思います。

さて、このエイサーを週末、皆さんも体育祭で演じることになります。是非とも「魂」を込めて演じきってほしいと思います。「これが与論のエイサーだ！」と自信と誇りを持って演じてください。

これこそが、私が日頃から皆さんに訴えている「自分のルーツに誇りを持って」というメッセージの真ん中なのです。エイサーに関していえば、上手にできるかできないかよりも、「魂」が込められているかいないかが重要です。見る人の「魂」を揺さぶるエイサーを期待しています。

ここからは補足になります。

大げさに聞こえるかもしれませんが、皆さんがエイサーや十五夜踊りなどをはじめとする、この土地に受け継がれてきた様々な伝統芸能を自分たちの体に落とし込み、染み込ませるように吸収することとは、探究活動などの研究テーマとして十分に応用可能だと思えます。また、それらの結果を今後後輩たちに引き継ぎ、伝統芸能を存続させることは、この島に一枚しかない与論高校の大きな存在価値でもあり、本土の学校にはない大きなアドバンテージを本校は持っているということでもあるのです。これらを上手に武器にしていけば、皆さんには絶対に他校の生徒に負けない魅力が生じ、後はしつかりとした学習が伴えば、希望通りの進学につながることが間違いなくあります。こういうことが実現すれば、生徒の皆さん、与論高校はスゴイ学校になりますよ。いっちょ、やってやろうじゃないですか。まずは、週末の体育祭です。「魂」の体育祭にしましょう。

本日、皆さんに配布してある「校長通信」にも関連したことを書いてあるので必ず読んでください。日々、自分を成長させる努力をしてください。以上で本日の講話を終わります。